

# 難易文と「がちだ」文

島岡紀子

キーワード：傾向解釈の難易文、「がちだ」文、状態性、個体、出来事

## 1. はじめに

日本語の難易文の先行研究は、主なものに Inoue(1978)、佐藤(1989)があり、いずれの場合も難易文には二通りの意味解釈<sup>1)</sup>が可能なが認められている。ひとつは「ある動作をすることの難易」を表すいわゆる「難易」の解釈で、もう一方は「ある出来事の起こる傾向」を表すいわゆる「傾向」の解釈である。この二通りの解釈の区別には、「傾向」解釈を確認するテストとして「がちだ」への言い換え可能性が共通して用いられている。

(1)は典型的な「難易」解釈の難易文の例で、自己制御可能な動詞を述語にして、文法関係の変化をとまって派生される。すなわち、「～ガ～ヲ」という他動詞の格配列が、典型的な状態述語と同じ格配列「～ニ～ガ」に変化している。これにたいして、(2)(3)aのような「傾向」解釈の難易文は、基本的に自己制御可能でない動詞を述語としていて、接辞が付く際に文法関係（格表示）の変更が起こらず、また、この「傾向」解釈の場合は各 b のように「～がちだ」に言い換えることができる。

(1) 初心者にはこの辞書が使いやすい。

(2) a. あわてものは事故を起こしやすい。

b. あわてものは事故を起こしがちだ。

(3) a. エリートは強い挫折感をあじわいやすい。

b. エリートは強い挫折感をあじわいがちだ。 (以上 Inoue(1978))

ただし、文法関係の変更が起こらずに元の格配列を維持する限り、自己制御可能な述語でも(5)bのように傾向の読みをもつことはできる、と佐藤(1989)は指摘する。

(4)a. 初心者にはこの辞書が使いやすい。(=(1))

b. \*初心者にはこの辞書が使いがちである。

(5)a. 初心者は、分厚い辞書よりも手軽な辞書を選びやすい。

b. 初心者は、分厚い辞書よりも手軽な辞書を選びがちだ (選ぶ傾向がある)。

これをまとめると、他動詞のような二項述語は、格配列を変えないで難易接辞を付加することによって傾向の解釈が出てくる一方、格配列を変更すると難易の解釈がでてくる、ただしその場合の述語は自己制御可能でなければならない、という制約があるといえる。

このように、一見したところ難易文の二つの意味解釈ははっきり分かれていて「がちだ」への言い換えの可否もそれを裏付けているように見える。しかし実際には、「がちだ」文そのものの性質や詳しい意味には深く触れられておらず、また、どういう理由で「がちだ」文との言い換えを取り上げた（「がちだ」文への言い換え可能性が有意義であると考えられる）のかは明らかであるとは言えない。難易と傾向の二つの意味解釈も、はっきり分けられるとは限らず、次の(6)のように解釈があいまい<sup>2)</sup>となる場合も少なくない。

(6) 身内だけのこじんまりした披露宴は町のレストランなどで行いやすい。

そこで本論では、まず「がちだ」文の性質を明らかにすることによって、傾向解釈の難易文と「がちだ」文はどういう性質に基づいて対応しているのか、またどの程度に対応しているのかを考察し、「傾向」とはどういうものであるのかを考えたい。また、これらのことから難易文の難易解釈と傾向解釈の関係についても、両者の違いはどこから生じるのかを考える。

## 2.「がちだ」文の性質

「がちだ」の意味・用法<sup>3)</sup>は次のように記述される。

(7) 動詞に付いて、意図しなくてもついそうしてしまうという意味を表す。マイナス評価されるような動作について言う。「どうしても・つい・うっかり」などの語や「てしまう」などとともに用いられることが多い。

- a. 寒い季節は家の中にこもりがちだが、たまには外に出て体を動かしたほうがいい。
- b. 彼女に電話すると、どうしても長電話になりがちで、いつも父親に文句を言われる。
- c. 甘いものはつつい食べ過ぎてしまいがちなので、ダイエット中は気をつけましょう。
- d. 惰性で仕事を続けていると、この仕事に飛び込んだころの若々しい情熱をつい忘れがちになる。
- e. 「『役不足』とは『その役を務めるには能力が不足している』という意味だ」という解釈は、ありがちな間違いだ。      (用例とも『日本語文型辞典』)

(7)では「傾向」という言葉は用いられていないが、「がちだ」は一般に「傾向」を表わす形式と理解される。「傾向」については当面、「性向、または事物の現れようとする状態」という辞書的な定義に則って考える。「傾向」をあらわす形式としては、他にも「傾向がある」「ことが多い」などが考えられる。

以下本節では、統語、意味、語用的な各側面から「がちだ」文の性質について順に述べてゆくこととする。

## 2.1 統語的側面

### 2.1.1 文法関係(格配列)

「がちだ」文ができる際には、文法関係(格配列)の変化はともなわない。すなわち、傾向解釈の難易文の場合と同様に、他動詞文の「～ガ～ヲ」を「～ニ～ガ」の格配列に変えることはできない。

- (8)a. 太郎が小さなミスをよく見落とす。
- b. 太郎が小さなミスを見落としがちだ。
- c. \*太郎に(は)小さなミスが見落としがちだ。
- (9)a. 太郎が小さなミスを見落としやすい。
- b. \*太郎に(は)小さなミスが見落としやすい。

日本語では状態をあらわす動詞の他、形容詞、形容動詞などの状態述語文では基本的に「～ニ～ガ」の格配列が現れる。状態性という意味特性と格配列という統語特性に相関関係があるとすると、このことは「がちだ」が、少なくとも典型的な状態性を備えていないことを示すといえる。

### 2.1.2 共起関係

「がちだ」は(10)～(13)各 a のように、受身や使役の接辞のついた形や「てしまう」「ておく」といった補助動詞のついた形にもつくことができる。

また、こうしたものは各々 b のように傾向解釈の難易文と言い換えても意味的にほぼ同義の文になる。

(10)a. 女性のパイロットは少ないので、好奇の目でみられがちだ。

b. 女性のパイロットは少ないので、好奇の目でみられやすい。

(11)a. 教育ママはとかくこどもに無理をさせがちだ。

b. 教育ママはとかくこどもに無理をさせやすい。

(12)a. 甘いものはつつい食べ過ぎてしまいがちだ。((6)② c 改)

b. 甘いものはつつい食べ過ぎてしまやすい。

(13)a. 心配性の人ふだんからなんでも余分に買っておきがちだ。

b. ?心配性の人ふだんからなんでも余分に買っておきやすい。<sup>4)</sup>

ただし、接辞や補助動詞でも、述語を状態化するとされる「ている」がついた場合(14)や、同様に状態化接辞と考えられる可能接辞(可能動詞)のついた場合(15)は、適格性が低くなる。

(14)a. サラリーマンは通勤電車でマンガを読んでいることが多い。

b. ??サラリーマンは通勤電車でマンガを読んでいるがちだ。

(15)a. 本好きの子は難しい漢字も読めることが多い。

b. ??本好きの子は難しい漢字も読めがちだ。

この理由は次節で意味的な側面からの説明を述べる。

## 2.2 意味的側面

### 2.2.1 状態述語と「がちだ」

動詞はその表わすことがらによって非状態を表わすものと状態を表わすものに分けられ、状態を表わすものは非状態と、2.1 でみたような格配列や共起関係といった統語面でさまざまなちがったふるまいがみられる。森山(1988)に述べられているように、「がちだ」は基本的に状態述語とは共起しないと考えることができる。次の(16)～(20)は典型的に状態的だとみなされる動詞に「がちだ」がそぐわないことを示す。

(16)a. よく気が付く子にはたいてい弟妹がいる。

b. \*よく気が付く子には弟妹がいがちだ。

(17)a. 大学には立派な図書館がたいていある。

b. \*大学には立派な図書館がありがちだ

(18)a. 日本の書類にはたいてい印鑑が要る。

b. \*日本の書類には印鑑が要りがちだ。

(19)a. 赤ちゃんには母親の声が分かる。

b. \*赤ちゃんには母親の声が分かりがちだ。

(20)a. 帰国子女は語学ができる。

b. \*帰国子女は語学ができがちだ。

前節で不自然な文になってしまった(14) (15)b も、「ている」や可能が状態化に関係する要素であるために共起できなかったのだといえる。

状態述語とそぐわない、という原則に留意して実例を見ていくと、(21)～(24)のように、一見したところ状態述語でも「がちだ」と結びついているように見えることがある。

(21)a. 休みの日もついつい家にいることが多い。

b. ??休みの日もついつい家にいがちだ。

(22)a. このような事故はよくある。

b. このような事故はありがちだ。

cf. このような事故は起こりやすい。

- (23) a. 年度末は臨時の会議がよくある。  
       b. ?年度末は臨時の会議がありがちだ。  
       cf. \*年度末は臨時の会議がありやすい。  
       c. 年度末は臨時の会議が入りがちだ。  
       cf. 年度末は臨時の会議が入りやすい。
- (24) a. 若い女性は野菜不足でにきびができることが多い。  
       b. ?若い女性は野菜不足でにきびができがちだ。  
       cf. 若い女性は野菜不足でにきびができやすい。

しかし、こういった例は「状態性」を吟味していくことによって説明がつく。まず、(21)～(23)の「ある・いる」については、典型的な状態である「存在」を表わす場合に対して、意志を持ってそこにとどまるというニュアンスの「いる」や、出来事の生起をあらわす「ある」があり、これらは必ずしも状态的であるとは考えられない。「ある・いる」に状態と非状態の二種を区別する議論はこれまでも行われており<sup>5)</sup>、「がちだ」との共起関係もその区別を裏付ける一つといえる。

次に、(24)の「できる」は可能ではなく「発生」のできるであり、これも状態動詞であるとは言えない。(24) b は、あまり普通には言わないという判断もあるが、(15) (20b)と比較すると、十分に容認可能だという判断は得られる。

このようにみてくると、それでは典型的な「状態性」とはどういうふうに定義されるのか、ということが問題になってくる。これについてはあとで再びふれるが、曾我(1986)などのようなプロトタイプに基づいた考え方がここでは適切であると思われる。

上の例で、「がちだ」文と難易文で必ずしも言い換え可能ではなく、許容度の判断に差が出る場合がある。これについて、次に一般性と特定性、自己制御性（意図性）の観点から考察をする。

### 2.2.2 一般性と特定性、個体の記述と出来事の記述

「がちだ」と難易文には守備範囲にずれが認められる。これには、文の内容の一般性と特定性の違いが反映していると考えられる。

- (25) a. ?安物のカサはこわれがちだ。  
       b. 安物のカサはこわれやすい。
- (26) a. 私のカサは安物だったのでこわれがちだ。  
       b. 私のカサは安物だったのでこわれやすい。
- (27) a. 冷戦後、国際社会から孤立しがちな国がいくつかある。(朝)  
       b. 冷戦後、国際社会から孤立しやすい国がいくつかある。
- (28) a. ??こういう雪は雨に変わりがちだ。  
       b. こういう雪は雨に変わりやすい。
- (29) a. 気温が高めの日には雪が雨に変わりがちだ。  
       b. 気温が高めの日には雪が雨に変わりやすい。

(25)は「安物のカサ」という一般的な個体について述べる文で、b の難易文に対して a の「がちだ」文の許容度は落ちるという印象を受ける。次の(26)は「(安物だった)私のカサ」と特定のものについて述べ、a、b どちらも自然であり、かつ両文にはニュアンスの差が感じられる。すなわち a の「がちだ」は「もう三度くらいこわれた」というような含みが感じられ、特定のできごとが現実には繰り返しているという「状態」を表わしているが、他方 b は「こわさないように気を付けて扱わなくては」という含みが感じられ、個体の一般的・総称的な性質を述べているといえる。(27)においては、a は現実には起こっている(ある国が国際社会から孤立する)ことを描写した文として自然であるが、b のように難易文に言い換えると、現実にはそういう出来事があるかどうかから意識が離れて、単にそういう性質を持つ国があることを表わすと解釈できる。

このように、一般性と特定性という考えをさらに進めると、文が個体について述べるか、出来事<sup>6)</sup>について述べるか、という違いに行きつく。まとめなおすと、難易文は個体の性質を述べる一方で、「がちだ」文は出来事の繰り返して発生する状態を述べるのだということになる。文法現象における「個体」と「出来事」の対立は、先行研究においても中右(1998)の「に」「で」の役割分担など、いくつかの現象が指摘されている。

### 2.2.3 自己制御可能性(意図性)

難易解釈の典型的難易文には、基本的に自己制御可能な動詞とのみ共起するという制約がある。一方、傾向解釈の難易文や「がちだ」文においては、そういった自己制御性の有

無に関わる制約はない。ただし、非自己制御的な副詞（つい・とかく）や「てしまう」などの要素があったほうが、より自然で容認可能な文になることが観察される。

(30) a. ??ふだんは専門と関係のない文芸書ばかり読みがちだ。

b. ふだんは専門と関係のない文芸書ばかり読んでしまいがちだ。

(31) a. ??ふだんは専門と関係のない文芸書ばかり読みやすい。

b. ふだんは専門と関係のない文芸書ばかり読んでしまいがちだ。

(32) a. ?所得減税は貯蓄に回りがちだ。

b. 所得減税は貯蓄に回されがちだ。

実際の用例を見ても、失敗動作など必ずしも意志的に行わない動詞や受身の形になったものを除いて、「てしまう」がないとかなり不自然に感じられる。ただ、はじめから自己制御性のない動詞の場合、次のようにかえって容認度が低いということも観察される。

(33) a. 辞書の初版には誤植が多く見つかりやすい。

b. ?辞書の初版には誤植が多く見つかりがちだ。

(34) a. ??暖かい部屋ではチョコレートが手の中でとけがちだ。

b. ?暖かい部屋ではチョコレートが手の中でとけてしまいがちだ。

c. 暖かい部屋ではチョコレートが手の中でとけやすい。

d. 暖かい部屋ではチョコレートが手の中でとけてしまいがちだ。

このことは、「てしまう」が「意志的な動作を非意志的な動作としてとらえなおす形式」（森山 1988）であることと関連して説明できる。「つい」「てしまう」などと共起して落着くのは、非意図的な出来事であることを示唆するが、本来的には自己制御可能性（意図性）を持っていながら、それがキャンセルされる、という図式が典型であるのではないかと考えられる。傾向解釈の難易文の場合、個体の性質叙述には自己制御可能性の有無は関与しないため、自己制御可能性による制約が働かないのであろう。

#### 2.2.4 必然性

「がちだ」は時間経過の動詞句（「春がくる」「時がたつ」など）のような起こることが



必然的な動詞句とは共起しないことが、森山(1988)で指摘されている。傾向があるかどうか述べることは必然的に起こることとは相容れないためであると考えられる。

## 2.3 語用的側面

### 2.3.1 マイナス評価のニュアンス

「てしまう」をめぐる議論において、そのモダリティの意味は、一般的には「残念・後悔といった話者の（マイナスの）感情・評価」「とりかえしのつかないこと」とされるが、評価については中立で「予想外の事態の実現」を表わす（杉本 1991）という見方もある。

「がちだ」も「てしまう」との共起から、同様の議論の可能性はあるが、(35)(36)の a のように、マイナスではないニュアンスを「がちだ」であらわすのは難しいようである。

(35) a. ??太郎は本番に強いので、あまり勉強しなくても試験に合格しがちだ。

b. 普段授業を妨害する生徒に限って、塾で勉強して試験に合格しがちだ

(36) a. ??このプログラムは込み入った計算を機械的に処理しがちなので好評だ。

b. 日本の役所はデリケートなことお機械的に処理しがちなので、評判が悪い。

(37) a. このプログラムは込み入った計算を機械的に処理しやすいので好評だ。

b. 日本の役所はデリケートなことも機械的に処理し（てしまい）やすいので、評判が悪い。

これに対して、(37)のように難易文の場合は評価に関しては中立であるといえる（ただし(37)a は難易解釈）。むしろ、マイナス評価の場合には、「てしまう」などの要素の助けを必要とする。

### 2.3.2 条件・限定

「がちだ」文は、いろいろな条件が付くほど文の許容度があがることが観察される。それによって、状態述語文でも(38)～(40)のように比較的適格性が上がることが観察される。これは、一般的・総称的な状況から条件や限定によってより特定の出来事、個別的な状況を述べることになることと関係しているといえる。

- (38) なかなか見つからない大事なものに限って、思わぬところにしまっておりがちだ。
- (39) 乾季には獲物が少なくなるので、ライオンは腹を空かせていがちだ。
- (40) ?最近の子どもは早期教育のおかげで入学前から難しい漢字まで読めてしまいがちなので、授業がやりにくい。

### 3 まとめ: 難易文と「がちだ」文の共通点と相違点

#### 3.1 「がちだ」文の性質

2.1 ～ 2.3 でみてきた「がちだ」文の性質をもう一度以下にまとめる。

統語的側面 ①格配列変更がない

②受身や使役、補助動詞と共起

意味的側面 ③状態の述語にはつかない

④特定性、出来事が現実世界で繰り返し起こる状態を描写

→典型的な状態性ではなく、動作・変化の「繰り返し」からくる「総称的」な状態を表す

⑤自己制御可能性(意図性)のキャンセル

⑥必然性

語用的側面 ⑦マイナス評価のニュアンスの付加

⑧条件・限定による許容度の上昇

以上の性質に加えて、形態的な側面から、理論的にはあってもよさそうなのに普通使わない、といった場合の理由として、形態の面での不安定さの関与も指摘される<sup>7)</sup>。

なお、「がちだ」文によく現われる動詞としては認識動詞の受身(思われる、みなされる)、非意図的な動作(の受身)(忘れる、見過ごす)、動作動詞の受身(語られる、処理される)が観察された。

#### 3.2 「がちだ」文と傾向解釈の難易文との対応関係

両構文は「傾向」をあらわすという意味的な共通点を持つが、カバーする領域にはずれがある。「がちだ」文は、基本的にはできごとが現実には繰り返して起こる状態を描写し、

そこにマイナスの感情・評価がある。これに対して、傾向解釈の難易文はどちらかと個体の内的な性質を叙述する文である。実際には、典型的に個体の性質を述べるといえるのは難易解釈の難易文であり、傾向解釈の難易文は個体を述べる文と出来事を述べる文の中間にあるといえる。

ここから、「傾向」と呼ばれるものにも、潜在的な性質を述べる内的なもの（主に傾向解釈の難易文）と、現実には繰り返して起こる事象を描写する外的なもの（主に「がちだ」文）の二種類があること、さらに、典型的には前者は個体について後者は出来事について述べる文であることが示唆される。

### 3.3 難易文の難易解釈と傾向解釈

難易文も上記のことと平行して、格配列変化をともしない難易解釈と変化のない傾向解釈では文の性質が異なることが分かる。すなわち、状態動詞や形容詞などと同様の格配列に変わる難易解釈の難易文は、個体の性質を叙述する状態述語文であるのに対して、他動詞の格配列を保ったままの傾向解釈の難易文は出来事を描写する文になりうる。こうした文の叙述内容の違いは派生の違いとも相関しており、統語や意味上のさまざまな違いをもたらすといえる。

難易文の難易解釈と傾向解釈については、まず派生の仕方に議論があるが、他動詞文の場合、格配列の変化の有無は文が何を叙述するかを反映して、それが文の意味的な性質に大きく関わっていることから、解釈の違いは派生の過程の違いから生じるという佐藤（1989）の見解が支持できる。

別々の派生過程を持つことは、それぞれにおいて結びつきうる動詞（述語）にも違いがありうることを示す。その基本的な区別を述べると、難易解釈の場合、自己制御可能性を持つという可能文と同様の制約があり、実際、可能と交代する形で動詞と結びついているといえる。それに対して傾向解釈の場合、意味・語用的制約がかかるものの、基本的に非状態述語全般と結びつきうるということになる。

### 3.4 今後の課題

本論で扱った「がちだ」文の性質のうち、もっとも重要な点はその「状態性」との関係である。「がちだ」で傾向を表すというのは、たしかに「状態述語」になるとはいえるものの、「傾向」とは「繰り返してそういう出来事動作が起こる」という状況で、「繰り返

し」は総称的な状態解釈へとつながるが、一般の状態性とは異質のものであることを述べた。すなわち、「がちだ」文は全体としては状態述語ととらえられるが、統語・意味のいろいろな特性から、典型的な「状態性」とは異質のものであることが明らかになった。「状態性」という分析概念については、その適用範囲や働きについてさらに考察を深める必要があるが、本論に現れた統語的・意味的現象の多くはこれまでに他の文法現象の考察にみられる議論と相互に支えあって「状態性」などの分析概念をより明確に規定する一助になると考えられる。

ヴォイス(構文)、格、そして状態性などの意味特徴の相互の関連についてはこれまでも、井上(1992: ヴォイスと格の交代現象(主語・目的語という文法関係の変更))、益岡(1987: ヴォイスと状態性)、曾我(1986: 状態性と格の交代現象)などいくつもみられるが、今後はこうした先行研究を踏まえつつ、個々の分析概念を明確にして、考察を深めること、それを通して、状態動詞や動詞を状態化してできる可能文・難易文を中心とした状態述語文全体の仕組み(ヴォイス、アスペクトとモダリティ)、非状態述語(動詞)文や形容詞文との関わりを見渡すことが課題である。

#### 【註】

- <sup>1)</sup> 佐藤(1989)は難易文に二種類の派生過程を想定し、二つの意味解釈の違いもその派生の違いに基づくものととらえている。井上(1976)の場合も二種類の基底構造を想定してはいるものの「傾向文」はその構造の違いからではなく意味的に生じると考えている。本論では佐藤の立場を支持。
- <sup>2)</sup> この文の場合、(i)身内だけの披露宴を町のレストランなどで行うのは容易である、と動作者の難易を読み込んだ解釈と、(ii)身内だけの披露宴が町のレストランなどで行われる傾向があると述べる解釈との二通りにを考えることができる。
- <sup>3)</sup> ここでは、動詞と関わる構文の研究という本論の性格上、動詞につく場合を中心に考察するが、名詞に付いて、「その名詞が表す状態になりやすい、その性質がかなりある」という意味を表す用法もある。その状態が普通の状態とは異なる場合、マイナス評価を受けるような場合に用い、語彙的には限られている。(『日本語文型辞典』)
- <sup>4)</sup> ここで「ておく」+「やすい」が不自然になってしまうのは、後に述べる「やすい」の表す傾向の内容に意志的行為をあらわす「ておく」がそぐわないせいだと考えられる。

主語になる名詞（次の例では「主婦」のもつ一般的な属性・性質を述べる文であれば、容認度は上がると思われる。

(i) 主婦は日持ちがする食品をふだんからまとめて買って置きやすい。

(ii)?主婦は日持ちがする食品をふだんからまとめて買って置きがちだ。

<sup>9)</sup>たとえば、中右(1994・1998)では場所格の「に」「で」の区別が「ある(いる)」の状態と非状態(過程)の述語類型という意味論的区別の直接的反映であると論じられている。

<sup>6)</sup>ここでいう「出来事」は、「個体」の概念に対して、関係性を含んだ概念であり、事態・事象・現象・状況などとも呼ばれる。

<sup>7)</sup>??いがちだ、??見がちだ、??寝がちだ、など。この判断については個人差もあり、ここでは深く立ち入らない。

#### 【参考文献】

井上和子(1976)『変形文法と日本語(上)(下)』大修館書店

井上和子(1978)『日英対照 日本語の文法規則』大修館書店

井上和子(1992)「ヴォイスの統語構造」『言語理論と日本語教育の相互活性化』

津田日本語教育センター pp.66-75

グループ・ジャマシイ編(1998)『日本語文型辞典』くろしお出版

佐藤ちゑ子(1989)「難易文の派生について」『弘前大学 文経論叢』第24巻第三分冊

人文科学篇 pp.69-88

杉本 武(1991)「『てしまう』におけるアスペクトとモダリティ」

『九州工業大学情報工学部紀要(人文・社会科学編)』第4号 pp.109-126

曾我松男(1986)「日本語動詞の状態性について」『月刊言語』第15巻第1号

竹沢幸一・John Whitman(1997)『格と語順と統語構造』日英語比較選書9 研究社

富田隆行(1997)『続・基礎日本語表現50とその教え方』凡人社

中右 実(1994)『認知意味論の原理』大修館書店

中右 実・西村義樹(1998)『構文と事象構造』日英語比較選書5 研究社

藤井由美(1992)「『てしまう』の意味」言語学研究会編『ことばの科学5』むぎ書房

益岡隆志(1987)『命題の文法』くろしお出版

森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』明治書院

由井紀久子(1996)「動詞シマウの意味の抽象化過程」上田・砂川・高見・野田・蓮沼編

『小泉保博士古稀記念論文集 言語探求の領域』大学書林

Inoue, Kazuko(1978)" 'Tough sentences' in Japanese" in Hinds, J. and I. Howard (eds.)

*Problems in Japanese Syntax and semantics*, pp.122-154 開拓社

【出典・参考辞書類】

出典のないものは作例である。

(朝) 朝日新聞(書評、社説、天声人語、社会面など)

『広辞苑 第4版』新村出(1991)岩波書店